

二つの自由

# 二つの自由概念

積極的自由「～への自由」

消極的自由「～からの自由」

## 二つの自由概念

絶対王政への抵抗をはじめ，過去の歴史において追求されてきたのは主に消極的自由

多様な価値観を持つ人びとが共存する社会では消極的自由の意義は大きい

しかし消極的自由のみで社会の望ましい在り方を考えようとする姿勢には違和感も

## 二つの自由概念

J・S・ミルの場合、**危害原則**を唱えたことなど、消極的自由論者とみられるが、特定の性格や個性の発展に高い評価を与えたことを考えると、積極的自由を主張したと言える面もある

## コメントから

他人に迷惑をかけなければ何をしても良いという考えでは、悪いことをする人も出てくる

他人に迷惑をかけない悪いこととは？

- 1 そんなものは存在しないが、迷惑をかけなければ良いという姿勢が蔓延すると破綻する
- 2 他人に迷惑をかけなくても悪いことはある

# エーリッヒ・フロム



ユダヤ系の心理学者・  
哲学者

ナチス政権成立後、ス  
イス・アメリカへ移住

著作に『自由からの逃  
走』(1941)、『愛する  
ということ』(1956)

# フロムの考える「自由からの逃走」

近代化によって、人は伝統的な権威や規範（第一次的絆）から、より自由な存在に

※外的権威からの自由

しかしこれは内面の孤独・無力感をもたらす

# フロムの考える自由からの逃走

「個人的自己からのがれること、自分自身を失うこと、いいかえれば、自由の重荷からのがれること」を求めるように

「自我喪失の結果、順応の必要が増大した(略)風変わりにならず、他人の期待に順応することによって、アイデンティティについての懐疑は静められ、一種の安定感が与えられる」



# フロムの考える自由からの逃走

ナチス政権当時のドイツでは、権力者や「民族」といったものへの服従、大衆や多民族の支配へ行きつくことに

これは極端なケースであるにせよ、フロムの指摘は現代の日本社会にも当てはまる面がある

# フロムの考える自由からの逃走

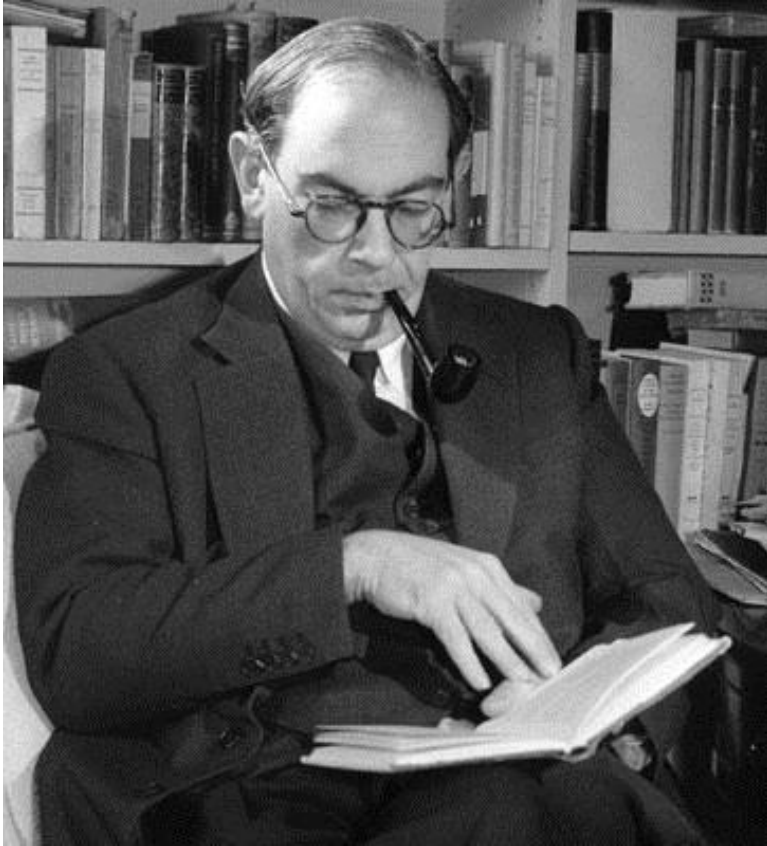
「消極的自由(～からの自由)」だけでは、個人は孤独になり弱められ、また順応が求められることで感情は抑圧されて独創性の欠如した社会に



「積極的自由(～への自由)」、**自発的な行為(アクティビティ)**によって独自性を発揮しつつ社会と結びつくことが必要

自由と個性を重視したミルに通じる視点

# アイザイア・バーリン



ユダヤ系のロマン主義  
研究者・哲学者

「二つの自由概念」  
(1958年の講演がベー  
ス)が20世紀を代表す  
る自由論として著名

# バーリンの自由論

消極的自由： 他人によって自分の活動が干渉され  
れないこと

単に障碍があるだけでは「(消極的)自由の欠如」には  
ならない

例) 経済的障碍のため家がかえない

他者による妨害の有無が大事

ただし社会の仕組みによって貧乏にされたと考える  
ならば別

# バーリンの自由論

他人の干渉を受けない範囲が広いほど自由も拡大  
自由が拡大すれば当然衝突するし、安全・正義・平等といったほかの重要な価値を守るためには、自由が制限される必要がある

同時に、絶対に保護すべき最小限の自由がある

そうでなければ、自由を思い浮かべることすらできないことに

# バーリンの自由論

積極的自由：自分自身の主人であること

自然・情念の奴隷から理性による自律へ

※情念 (passion)

# バーリンの自由論

積極的自由：自分自身の主人であること

自然・情念の奴隷から理性による自律へ

※情念 (passion) ← 受動的 (passive)

# バーリンの自由論

積極的自由：自分自身の主人であること

自然・情念の奴隷から理性による自律へ

※情念 (passion) ← 受動的 (passive)

受難 (the Passion)

この意味での積極的自由の代表的思想家は  
カントだが、プラトンにまで遡る西洋哲学の伝  
統



# バーリンの自由論

しかし、積極的自由の理想である理性的な、奴隷ではない真の自分とは何か？



当人ですらわからない「本当の自分」を目指すことを強制する理論の土台となる危険もある

禁欲的・抑圧された自己像も「真の自分」？

# バーリンの自由論

バーリンは積極的自由よりも消極的自由を高く評価したと見なされるが、無条件に消極的自由を擁護したわけではなく、価値の多元性、不安定な均衡を訴えるにとどまる



非干渉的文化的多元主義

奴隷制や儀式的殺人、ナチス、拷問などの回避

# バーリンの自由論

「自己の確信の正当性の相対的なものであることを自覚し、しかもひるむことなくその信念を表明することこそ、文明人を野蛮人から区別する点である。

これ以上のものを要求することは、深い形而上学的要求であり、これを実践の指導とすれば、深い、そしてはるかに危険な道徳的・政治的未成熟の兆候となる」

# 自由とアイデンティティ

相対主義をつきつめると

相対主義（人それぞれという考え）の魅力

他者の判断を尊重という面がある

相互の自由を認め合う寛容な姿勢

自分らしさ（アイデンティティ）の追求

# またまたミルの言葉

「ある人がともかくも普通の常識と経験とをもっているならば、彼自身の生活を自分で設計する独自のやり方が最善のものである。その理由は、**その設計それ自体が最善だからではなく、それが彼自身のやり方だからである**」

自分自身に忠実であれ

自己実現を認める姿勢としての相対主義

# 相対主義をつきつめると

しかし「自分で選んだ」というだけで、本当に意義があるのか

バーリンの問題意識を共有するなら、こういう問いかけには警戒心をかきたてられる

しかしバーリンに学んだ**チャールズ・テイラー**は、この問いかけを重要なものと認識

# チャールズ・テイラー



カナダ・ケベック州出身

ロマン主義・ヘーゲル哲学の研究者

多文化社会や共同体主義についての著作多数

政党の副党首を務めたことや、選挙に出馬したことも



# 相対主義をつきつめると

近代社会では個人の自由が尊重されており、道徳についても「個人の考え次第、ただし他者の権利は侵害、他者への危害は禁止」という考え方が広く浅く流布

本当にそうなのか？

# 相対主義をつきつめると

個人の選択だけが重要→裏を返せば、選択の中身自体の価値は同じ

# 相対主義をつきつめると

個人の選択だけが重要→裏を返せば、選択の中身  
自体の価値は同じ

恋人を助けるか母を助けるか

# 相対主義をつきつめると

個人の選択だけが重要→裏を返せば、選択の中身自体の価値は同じ

恋人を助けるか母を助けるか

恋人／母親を助けるか自分だけ逃げるか

# 相対主義をつきつめると

個人の選択だけが重要→裏を返せば、選択の中身自体の価値は同じ(価値の差がない→無価値)

恋人を助けるか母を助けるか

恋人／母親を助けるか自分だけ逃げるか

恋人／母親を助けるか服の汚れを気にするか

# 相対主義をつきつめると

ミル(や, サルトルのような**実存主義者**)の考えに従うならば, いずれかの選択肢を当人が選んだことでその選択肢が最善のものとなる  
つまり選択後に価値が生じるということ

# 相対主義をつきつめると

ドーナツを食べるかアイスを食べるかといった趣味・嗜好の問題ならばよいが、道徳的判断で「どちらを選ぼうとあなたの自由です」という具合に相対主義で済ませることはできない

# テイラーの考える選択と自己実現

選択肢のなかに「より良い」選択が存在しなければ、選択の意味がない

それゆえ「良さ」は個人が選択した結果として生じるものではなくて、**選択の前**にある(言語の網の目を通じて)



# テイラーの考える選択と自己実現

ただし「良さ」は権威によって示されるものではなく、  
あくまでも**自己の内に源泉がある**と考えなければ、自由  
な社会にはならない

「自分とは何か」というアイデンティティ自体が、真空状  
態のなかから生まれたり、自分の思い付きだけで生み  
出されるものではないということ

# テイラーの考える選択と自己実現

「本当の自分らしさ」という考えには、「自分とは何者か」についての独自性や創造性が含まれている

これは社会・言語の網の目の中で練り上げられるものだが、同時に既存の社会規範に抵触する場合もある

自分らしさというものは、単に「自分がそうしたいから」という言い方では表現できないし、承認も得られない

他者との対話のなかで定義され、また何度でも定義されなおされるもの

# テイラーの考える選択と自己実現

自己決定や自分らしさ、人それぞれという考えは、寛容や自由、自己実現というアイディアと関連がある重要なものだが、少しずつズレて利用されたり、誤解されている面がある

自由や自己実現の否定

→古臭い保守主義

自由や自己実現の中身は

自分一人で決めらるという考え

→相対主義・虚無主義